

## 2010年10月号

### 6月のヨーロッパ 自然と人と・・・出会いの楽しみ

6月1日から10日までデンマークとドイツを訪問しました。定年後のライフワーク「世界文学紀行」の一環です。昨年11月に訪れたイタリアでのシェクスピア作品『ロミオとジュリエット』『ベニスの商人』に続き、デンマークでは『ハムレット』の舞台となったクロンボー城と、アンデルセンの生家のあるオーデンセを訪れました。ドイツではグリム兄弟、ゲーテ、ヘッセのゆかりの地を訪ね、さらにローライ伝説を秘めたライン川クルーズ船にも乗りました。

新緑から深緑へ。ヨーロッパは1年で最も美しい時節。湿度も低く快適でした。夏至に近いため高緯度にあるデンマークもドイツも、朝4時には明るくなり、夜も10時過ぎまで白んでいました。街には数百年の歴史が刻まれた重厚な建物が並んでいます。地方に行けば、どこまでも広がる田園と森と赤レンガの家々・・・シャッターチャンスにこと欠きません。

そんな訪れた各地で思い出に残る出会いと名作の舞台でのレポートをこれから紹介していきます。第1回はデンマークでのエピソードです。

### 出会い その1 列車の中でのありがたい“助け舟”

コペンハーゲンを出た列車は広い緑の平原を北へ北へ。私はデンマークに着いた翌日、最初の取材地である『ハムレット』の舞台・クロンボー城に向かっていました。途中で車掌が検札に来ました。そこで驚いたのは、ちゃんと駅で買った切符なのに車掌はなんと不正乗車の罰金を請求してきたことです。「買った切符に乗った駅での刻印がない」と言うのです。

デンマークもその後に訪れたドイツも、日本のような駅の改札はありません。乗客は買った切符を乗るときにホームにある器械で刻印しなければいけないのです。そこまでは知らなかった私はそのまま乗車し悠然として座っていたわけです。

その時、幸いなことに前に座っていた恰幅の良い紳士がと口をはさんでくれました。「わざわざ日本から来てくれたお客さんなんだから」。その紳士の言葉にくだんの車掌もそれ以上は追及せず、問題は無事に決着したのです。

最初の取材旅に思わぬ“助け舟”。見知らぬ土地で受ける親切や心遣いほど嬉しくありがたいものではありません。これが機縁で『ハムレット』の作品自体についても紳士と大きく話が弾んでいったのです。その詳しい模様は「ハムレット紀行」のところで紹介していくことにします。

### 出会い その2 あなたは“静かさ派”それとも“賑やかさ派”？

3日目はアンデルセンの町オーデンセへ。特急で西へ1時間20分。私の切符は61番席でした。スタンダード（普通車）席ですが4人が向き合う形の間にはテーブルがあり、頭

が揺れないようにヘッドレストもつき、飛行機のビジネスクラスくらいゆったりとしています。

向かいに座ったのは30代と思われるデンマーク女性でした。まともに目を向けるのがはばかれるほど胸の谷間が大きく開いています。彼女はもう一つの空いているシートに足を伸ばすと赤い表紙の本を取り出しました。ブックカバーのタイトルは「Hegel」。

「難しい本を読んでいるんですね。学生さんですか？それとも働いていらっしゃる？」

「高校教師です。ヘーゲルは面白いですよ。これからオーデンセにある大学に行くところなんです」

「それは偶然ですね。実は私も40年前には高校の教師をしていました」と仲間意識が出てきて少々勢い込んで話しかけたところ、彼女はあわてて指を口に当て「静かに！」とのサインをしたのです。

よく見ると通路の上には「静粛地帯」との掲示があります。途中でアナウンスもありました。「車内では静かにお願いします。会話をされる方は別室でお願いします」と。

なるほど、なるほど、国民性とはこうも違うものなのですね。一般に日本の電車内も静かで、座っている乗客は寝ているか新聞に目を通してしているか、最近では携帯メールに集中していますよね。

かつて私が現役時代に特派員として滞在していたラテン・アメリカではまったく反対でした。電車やバスの中は賑やかで、原色が塗られたバスの中ではビートのきいた音楽まで響いていたものです。あるとき研修会で訪日したパナマ人が帰国後に語った言葉の驚きは忘れることができません。彼はしみじみも言ったのです。

「日本人はどこに行っても親切でした。でも“Tokio estaba muerto”（「トーキョー エスターバ ムエルト」と読みます。スペイン語はローマ字読みでも基本的に通じます＝（東京は死んでいた）」と。いつも賑やかな中南米から、街も電車内も静かなトーキョーに行くと、このような感想を抱くのも当然なのかもしれません。

ところ変われば本当に生き方も文化も変わるのです。そんな感慨を乗せながら、列車はどこまでも緑の平原を走っていたのでした。

### 出会い その3 カメラもドキドキ、美少女たちの撮影

「東京からのカメラマン」——こんな言葉が意外な神通力(?)を持っていた話です。今回の旅には私は思い切って一眼レフの最新型カメラを買って行きました。「ライン川クルーズもある。望遠レンズも必要だし！」と。そこで、アンデルセン博物館の受付に着くと自然のうちにこの言葉が出てきたのです。

と、受付の女性は入場券と室内案内のパンフレットを私に手渡しながら言ったのです。「じゃあ入場料は結構ですよ」。なんとありがたい特別扱い！館内はフラッシュなしの撮影もOK。“じゃあ、精一杯アンデルセンのことを日本でPRしなくっちゃ”なんて私は新しいカメラのシャッターを押したのでした。

話は続きます。建物の外の写真を撮っていると、後ろから声がかかってきました。「撮って、撮って！私たちを撮って？」。振り向くと実にキュートで可愛い美少女8人ほどです。地元の高校生だといいます。私は少し冗談を交えながら言いました。

「いいですよ。撮ってあげましょう。こちらは東京からのカメラマン。美人の皆さんの写真はもしかしたら日本のどこかの雑誌の表紙に載るかもしれませんよ」

ポーズを決めた彼女たちはとびきりの笑顔で私のレンズに収まったのでした。予期しなかったハプニング。楽しい出会いの一つです。

#### 出会い その4 取材先でクッキングの腕前披露も

S G I（創価学会インタナショナル）のメンバーでもある私は、コペンハーゲンにあるS G I 北欧文化会館も訪れました。近郊のノードハン駅から歩いて10分。白亜の文化会館は緑豊かな前庭や樹木と美しく調和していました。前理事長のカミオさんによると、現在はデンマークの教育界が創価教育に寄せる関心が高く、アスコア高等学校は池田大作S G I 会長を顕彰、その庭園にも名前を付けているとのこと。また創価大学や創価高校との交流も活発に進められているようです。

私は建物の周囲や屋内を撮影した後、この日の会館の当番だという女子部員と懇談しました。彼女はこの日、会館で機関誌の編集作業をしていたメンバーと自分のための夕食を会館のキッチンで作る予定だが、ついでに私の分も作ってくれるといいます。

「それはありがたい。でも作っていただくだけでは申し訳ないから私がお手伝いしましょう。こう見えても、自分は定年後に1年間クッキングスクールに通い、料理の腕はセミプロですよ」と私は大げさに宣伝。さっそく彼女の指示に従い、野菜切りや調理の一部を手伝いました。鶏肉と玉ねぎ、インゲン、ピーマンを炒め、煮込み、ココヤシで味付けをした料理は絶品の出来でした。

取材先の海外で包丁を握る。こんなうれしい体験はめったにできるものではありません。私の取材旅を、もうひとつ別のカラーで彩ってくれたのでした。